児童文化財の実践力向上における課題研究

― 保育現場での実践を通して ―

Research on issues in improving the practical skills of children's cultural properties

-Through practice at childcare sites-

松　尾　裕　美

Hiromi Matsuo

「福岡女学院大学紀要　人間関係学部」第 23 号抜刷

2022 年 3 月

児童文化財の実践力向上における課題研究
― 保育現場での実践を通して ―

Research on issues in improving the practical skills of children's cultural properties
-Through practice at childcare sites-

松　尾　裕　美
Hiromi Matsuo

Ⅰ．問題と目的

平成 29 年『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』が公示され翌年４月改訂された。特に『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の改定は、乳児期の内容が乳児と１歳以上３歳未満児とに分けられ、より細やかな記述がみられる。「幼児期の教育」の積極的な位置づけや職員の資質・専門性の向上が挙げられている。改訂を受け、保育者養成校では、新設の科目もあり、幼児教育の専門性、質の向上を目指し教科が配置されている。

保育者養成校の学生の授業では、講義科目、演習科目とに分かれている。保育内容「言葉」においては演習科目であるため、実際に、児童文化財に触れる機会がある。これらは、いかに言葉を使い、子どもたちに楽しい時間となるように実践的な練習を重ねていきながら、専門性の向上へと繋げていく。これらは、教材作成には関わらず、エプロンシアター等は出来上がった教材で行うことが多い。

保育の現場では、中々演じることの難しさや、作成まで時間がかかるなどの理由で、ごく限られた保育者がこれら、（パネルシアター・ペープサート・紙芝居等）を担っていることが実情である。三原（2018）の研究では、養成校の学生がパネルシアターの発表をきっかけに、学生の語彙力の増え方について研究がなされている。子どもたちの前で、演じることを繰り返していく中で話す言葉、語彙が増えていき、子ども達との会話が増えていっている研究結果がある。そこではパネルシアターを使っての語彙数に着目され、個別の課題がはっきりと提示されていない。

児童文化財等を子どもたちに伝える保育者の役割については、「保育内容言葉」の保育領域において「日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語に親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士などや友達と心を通わせる」[2)]とある。また、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」[3)]とある。

実習指導などにおける模擬保育において、絵本や物語などの知識はあるが、その場を子どもとともに明るく、楽しい雰囲気にするという現場観というものが乏しい。松尾（2017）によると保育全般に関する感想では、「体験して分かる自分の課題の甘さ」「子どもの創造性を引き出していくような展開の難しさ」が[4)]挙げられている。それらの課題を受け、演習科目の中で、「素話」「絵本」「紙芝居」「ペープサート」「パネルシアター」「エプロンシアター」等を実践力向上のために取り入れ、模擬保育を授業内で多く取り入れてきた。

本研究では、保育者養成校の学生がゼミ活動で学んだ児童文化財の表現技術を保育現場で実施し、児童文化財の作成（パネルシアター等）を通してどのような専門性を身に付けたか、意識調査することを目的とす

る。演習科目の授業は、実践体験を持って行われることが多く、実習前の模擬保育として学生同士が子どもと保育者の役割を担って体験を共にする授業体系が一つの特徴である。模擬保育の経験後に実習に取り組む学生は、演習科目の実践体験を実習先の幼稚園、保育園、施設で活用できているか。また、保育スキルであるわらべうたや絵本の読み聞かせ、素話や指遊び、パネルシアター等、その実践を通してどのような専門性が身についたと感じられたかを明らかにしたい。また、実践後の自己課題について明確に考察を重ねて実践力向上につなげることを目的とする。

Ⅱ．児童文化財の位置づけ

現代保育用語辞典[5]によると、「児童文化財」とは「子どもの成長のために大人や子ども自身、そして大人と子どもが協同して歴史的に、また社会的に作りだした、子どもに直接・間接影響を与える諸事象・諸事物を総称した概念である。広義では、子どもを取り巻く諸事象・諸事物すべてを指す。具体的には①玩具・遊具②遊び③書籍（絵本・児童文学等）④お話等⑤マンガ⑥テレビ・ビデオ⑦ラジオ⑧紙芝居・パネルシアター等⑨児童劇・人形劇⑩映画、⑪音楽などがある」とある。保育者が提供する児童文化財が幼児の発達や興味に即しているか、幼児がどう成長するかなどを効果的に活用するためにしっかりと学ぶ必要がある。児童文化財は、子どもの言語面、情緒面の発達に大きく貢献しており、幼児期においては、欠かすことのできないものであると考えられる。

Ⅲ．幼稚園教育要領に見る「10 の姿」

2017（平成 29）年告示第５次改訂が行われ、改訂において付け加えられた点として、第２章、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が加わったことである。資質・能力を一体的に育むように努めることを念頭に置いて改訂がなされている。

⑴　豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分ったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」

⑵　気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」

⑶　心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

１．健康な心と体
２．自立心
３．協同性
４．道徳性・規範意識の芽生え
５．社会生活との関わり
６．思考力の芽生え
７．自然との関わり、生命尊重
８．数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
９．言葉による伝え合い
10．豊かな感性と表現

授業で行った文化財に触れ、教材を実際に作成し、保育現場での体験を通して実践力向上につなげるには、どのようにして行くことが求められるか自己振り返りアンケートを取り、自己課題を明確化していく。

Ⅳ．研究の方法

１．対象

A 市内の保育者養成校のゼミ学生 12 名

２．調査期間

20XX 年 X 月～ X 月＋３ヵ月までの期間

３．方法

学外活動後及びゼミの授業終了後、回答は任意であることを伝えたうえで協力を依頼し、同意が得られた学生のみに調査を行った。児童文化財を作るところから発表までの自己課題についてアンケートを行い、該当するところにチェック方式で回答をお願いし及びその他気付きについて自由記述形式とした。

４．倫理的配慮

本研究の趣旨を学生に説明し、研究への協力について依頼すると同時に、調査における集計データは個人が特定されないように配慮を行うことについて詳細な説明を行った。

本研究は福岡女学院大学倫理審査委員会の承認を受け実施した（審査番号 21003）。調査への参加、途中辞退などの自由、プライバシーの保護について、デー

タの管理方法、成果発表について、書面・口頭での説明の後、同意を得たデータのみを使用した。

Ⅴ．結　果

ゼミ生へのアンケート結果から、制作から発表、実践後の学生の意識調査を行った実際に児童文化財に触れる機会はあっても、自ら企画を行い制作するという経験がないことが分かった。児童文化財を自分で作るというイメージがなく、児童文化財を制作したことのない学生たちは様々な問題に直面し、指導を受けながら最後まで仕上げていくことが出来た。製作途中で相談を受けたものとして、「Pペーパーの上に重ねてPペーパーを貼りたいが、すぐにはがれて落ちてしまう」また、「カットを描き上げた後に輪郭をマジックで先に書いた方がよいか、色を塗った後に書いた方がよいか」など、児童文化財作成において初歩的な質問が相次ぎ、92%の学生が今回初めてであったため、パネルシアターとはどのようなものか詳細に説明を行い、Pペーパーの持つ特性や色の塗り方、糸止めなど実際に見本を作り説明を繰り返していった。今回実践した学外活動保育施設は、実習先ではないため準備の段階で悩むことも多かったようだ。また、幼稚園実習・保育実習を考え０歳から５歳児まで対応できるものとして取り組んでいる。制作決定にあたりほかの実習でも使えるようにと季節年齢を限定せず、どこの実習先でも使用できる教材などを考慮し決定している。実際に学生たちが選んだものは、絵本から「７匹の子ヤギ」「ぐりとぐら」を始め、子ども達が親しんでいるものを選んだ傾向がみられた。歌遊びに関しては、歌いながら動かしていく「どんないろがすき」「ぞうさんの帽子」などがみられた。

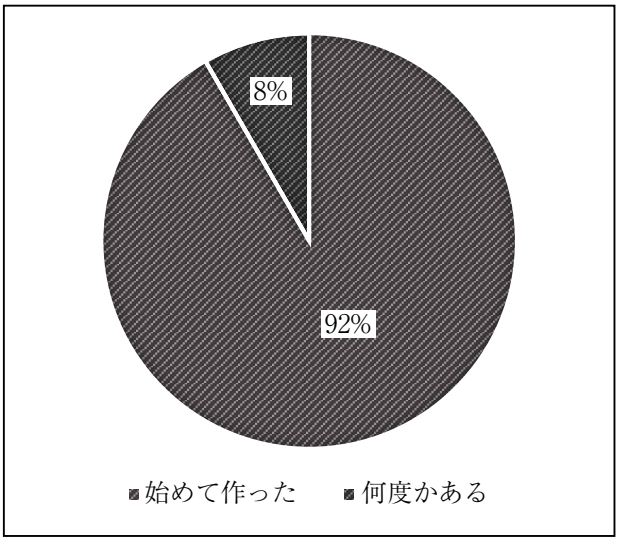


図１．制作経験回数

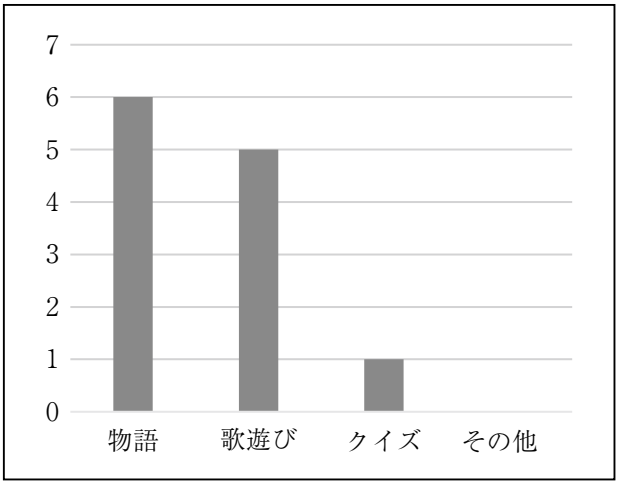


図２．制作した教材

制作にあたって、学生たちが大変だったと感じたアンケート結果では、図３．より33%の学生が教材へ色を塗る作業が一番大変であったと答えている。学生の様子を観察している折には、何を作ろうかと悩んでいるようであったが、実際に決まると、絵を描く作業が27%、と二番目に高かった。色を塗ったり、絵をかいたりすることの方が、題材を決めることよりも多くの学生が悩んでいたことは意外であった。制作の途中で、「作る」という課程と「演じる」という課程を別々に考え作成していることも結果からは意外であった。絵を描くところでは色を塗る工程が思ったよりも時間がかかり大変だったと答えていた。内容を考えるところは７%、セリフを考えたりしながら作るところは20%と教材が出来上がった後に問題を抱え、内容

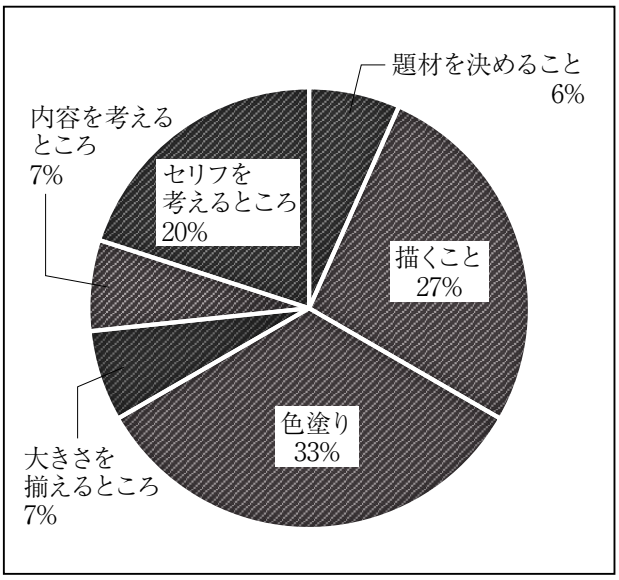


図３．制作にあって大変だったこと

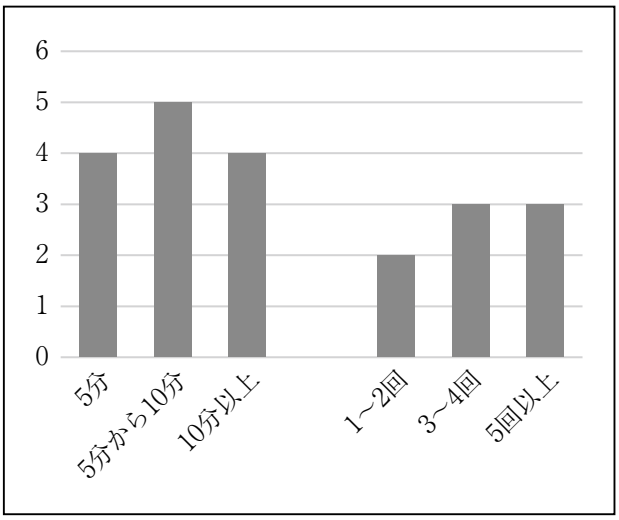


図４．発表時間・練習回数

を楽しく伝えるセリフ等で大変だったと答えている。

図４を見ると、発表時間は、５分か10分の内容が一番多く物語は10分以上の物もあった。練習回数を見ると、思ったほど練習をしていないことが分かった。練習の仕方もただ流れを演じるものが多く、見せ方や鏡に映して行ったり、録画し自分がどのように映っているかを細かく確認を行った学生はいなかった。模擬保育の段階では練習時間及び回数の少なさの結果が出ており、途中で内容が飛んでしまったり、パネルをうまく貼ることができず手間取ることが多々あり、なお練習が必要であると助言することがあった。歌遊びにおいては、歌いながら貼ることがスムーズに行かない学生が多かった。

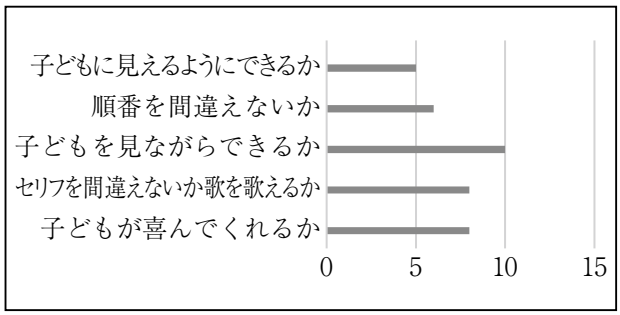


図５．不安に思っていること

実践の前に学生が不安に思っていることを尋ねてみた。図５．によると、「子どもたちを前にきちんと子どもの顔を見ながらできるかどうか不安に思っている」学生が10名、「セリフを間違えないか」、「子どもたちが喜んでくれるか」８名の学生が実践前に不安に思っていた。見せ方についてはある程度自信があるようであるが、「順番を間違えずにできるかどうか不安な学生」が５名いた。

学外活動の保育園での実践後にアンケートを取った。学生たちが発表後に難しく感じた点をまとめた。

図６．によると、実際にやってみて気が付く点が多くあり、その中でも、実践前はさほど難しいとは感じていなかった「お話しの展開に合わせたセリフ」が12名全員の学生から難しいと感じたとの結果が得られた。これは、実際にやるとやらないとではこのような差があることが顕著な結果となった。また、実際に「子どもたちからの反応に対しての応答のコメントが出せない」という学生が７名という結果が出た。学生たちの臨機応変な対応に未熟である結果となった。ある程度、子どもたちの反応は予想していたが、「予想に反した反応には対応が難しい」との結果も出た。ここで考えられることとして、やはり練習の回数を増や

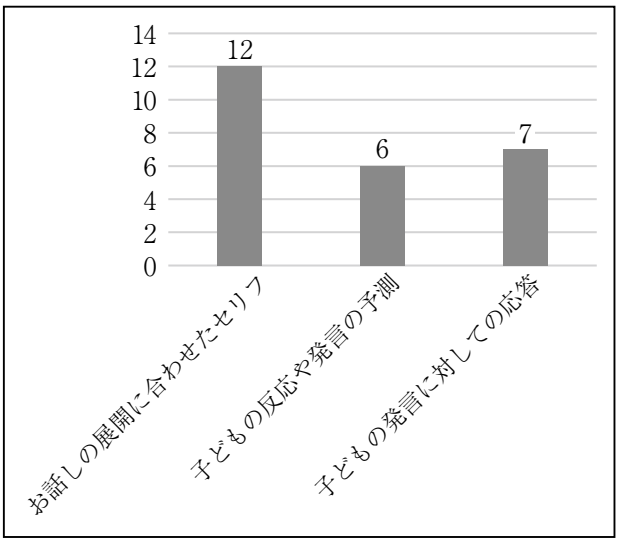
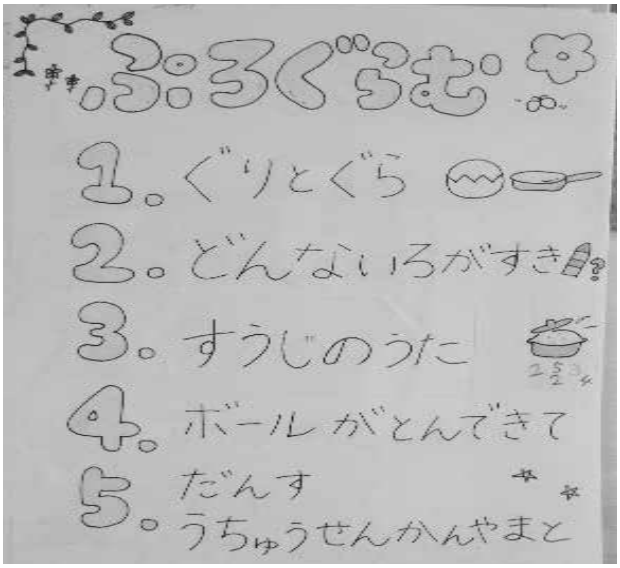


図６．発表後難しく感じた点

し、セリフを暗記し、予想される子どもの反応への対応の仕方を学ぶ機会を増やしていく必要があるということが明らかになった。

アンケートにて、自己課題が見つかった　か否かを問うてみた結果、全員の学生が「児童文化財の発表において自己課題が見つかった」と答えていた。自己課題・改善点を記述式で答えてもらった結果、「登場人物に成りきること」「スムーズに進めることができるスキルを身につけること」「子どもの反応への対応力を身につける」「発表と発表の間の話しかけや手遊びなどでのつなぎ方を身につける」「セリフが早すぎることがわかったので、ゆっくりと話す」「教材の配置が子どもにとって見にくい位置となっていたことがわかった」などが挙げられていた。



Ⅵ．考　察

ゼミ活動が始まった４月から、児童文化財に触れ、「制作するにはどのような準備が必要か」、「演じるには」ということを授業の中で説明を行い、活動へと繋げてきた。いざ発表となった時に「計画の甘さ」が学生たちの課題となった。幼稚園実習と保育実習で実際に子どもたちとの触れ合いはあり、「ある程度できるのではないか」と過信しているところが見受けられた。練習の回数が非常に少ないことが明らかとなったことにより、練習回数を増やす必要がある。今回の発表を通して準備の段階からみていくと、図３の結果より明らかとなったことは、初めて児童文化財を作成することで一番大変だったことが、色塗りや描くことだということが内容を考えることよりも多く意外だった。今回の児童文化財を自分の手で最初から作り上げ、子ども前で発表するという計画を立てて取り組んだ教材発表であった。学生たちにまず、教材の種類等それぞれに触れるきっかけとなったこと。教材づくりの手がかりを提供することができたということを考えると第１回目での発表では、グループで行うために必要な演じる順番、準備までの間の時間のつなぎ方、見せ方、園児参加型での言葉のかけ方など多くの学びの時となったようだ。園児参加型では、言葉を使い、順次適宜にあそびの発展を促す刺激をどのように加えていくことができるか学生たちの課題となった。今回の活動を観察して気づいたこととして、言葉を使った表現活動を楽しく遊べるものとしてパネルシアターは有効なものとして位置付けられた。子ども参加型のパネルシアターでは、高次元への発展とは行かなかったが、学生たちは、子どもの持つ可能性を上手く引き出していく方法を「言葉を使い」子どもたちの気づきに繋げていく努力を行っていたことが挙げられる。子どもたちが参加し、遊びの成果を友達に見てもらえるうれしさがこの活動にはあると感じた。グループで行う発表を通して、演じることから、力を合わせる協調性、計画性などを多くの学生が学んだ活動となった。次回以降では、それぞれの課題を丁寧に精査し改善へと繋げていくことに期待している。

引用文献

1）三原詔子・中村季恵、福岡こども短期大学研究紀要第 30 号（2018）
2）保育所保育指針（平成 29 年告示）厚生労働省
3）幼稚園教育要領（平成 29 年告示）文部科学省
4）松尾裕美（2017）模擬保育に学ぶ教育方法論　福岡女子短期大学紀要 82 号 pp ５～６
5）岡田正章他（1997）　現代保育用語辞典　フレーベル

参考文献

1．幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成 29 年告示）内閣府　文部科学省　厚生労働省
2．幼児教育の実践の質向上に関する検討会資料（平成 30 年）幼稚園教員等に求められる資質・能力とその研修体系　神長　美津子
3．文部科学省（平成 27 年 12 月）
中央教育審議会答申
4．文部科学省保育教諭養成課程研究会資料
（平成 30 年）
5．松尾智則、古賀和博、増田隆、永渕美香子、山崎篤、櫻井祐介、山下雅佳実（2020）中村学園大学・中村学園大学短期大学部　研究紀要第 52 号